



[プライマネージ]
PRIMANAGE
CSS Open Package Series for Enterprise Resource Planning

データベース管理

データベースは、業務処理を行うに伴いデータ量が増大し続けます。

従って、システム管理者は、日常的にデータのバックアップを行うとともに、データベースの使用状況を把握しておく必要があります。

データのバックアップについては、月・週・日の単位でバックアップすることをお勧めします。

バックアップ対象データは、BSS_PACK¥DAT フォルダと DB データです。
DAT フォルダには、テーブル関連情報が入っていますので DB データとともにバックアップが必要です。

また、領域が不足した場合には、領域の拡張も行わなければなりません。

ここでは、データベースの日常管理について記します。

■ ORACLE

バックアップ

BSS_PACK¥SHELL¥DBTool には、BACK_PACK.BAT というバックアップ用の BAT ファイルがあります。

このファイルを DOS プロンプトから実行することで、DAT ファイルと DB データを別ドライブにバックアップすることができます。

使用方法は、次のとおりです

BSS_PACK¥SHELL¥DBTool> BACK_PACK F

ここで F は、バックアップデータをセーブするドライブ

この結果、Fドライブに BACKUP フォルダと、その下に DAT と DB フォルダが作られ、データはそれぞれの場所にセーブされます。

バックアップデータをセーブするフォルダは、十分な容量を確保してください。

バックアップしたデータは、Windows NT のバックアップツールを使用して、テープデバイスにバックアップします。

ORACLE のデータベースを直接テープにバックアップする方法については、ORACLE のマニュアルをご覧ください。

データベースの拡張

データベースは、[作成ドライブ]:¥BSS_DB フォルダの下に作成します。

作成する DB は、DBXXX.dat (XXX はシステム ID) という名前で各システムごとに作られます。

各システムがどの程度データ領域を使用しているかを調べるには、Oracle Storage Manager を使用します。

Oracle Storage Manager の起動

スタートメニュー → Oracle Enterprise Manager → Oracle Storage Manager を起動します。

ユーザー名(U):
 パスワード(P):
 サービス名(S):
 接続モード(C):

Oracle Storage Manager を起動するとログイン画面になりますのでユーザー名 (bss) 、パスワード (xxxxxx) を入力します。

名前	状態	容量(MB)	使用率(%)
DEB_C	ONLINE	4,000	0.000
DEB_R1	ONLINE	2,000	0.170
DEB_C11	ONLINE	2,000	0.000
DEB_C2	ONLINE	2,000	0.000
DEB_C1	ONLINE	44,000	0.000
DEB_OU	ONLINE	2,000	0.000
DEB_R	ONLINE	2,000	0.000
DEB_P	ONLINE	2,000	0.000
DEB_N1	ONLINE	2,000	0.000
DEB_S1	ONLINE	10,000	0.000
DEB_O4	ONLINE	2,000	0.000
DEB_O3	ONLINE	2,000	0.000
DEB_S5	ONLINE	2,000	0.170
DEB_S6	ONLINE	2,000	0.000
DEB_R1	ONLINE	2,000	0.000
DEB_S1	ONLINE	4,000	0.000
DEB_S2	ONLINE	2,000	0.000
DEB_S3	ONLINE	2,000	0.000
DEB_S4	ONLINE	2,000	0.000
DEB_S5	ONLINE	2,000	0.000
DEB_S6	ONLINE	2,000	0.000
DEB_S7	ONLINE	2,000	0.000
DEB_S8	ONLINE	2,000	0.000
DEB_S9	ONLINE	2,000	0.000
DEB_S10	ONLINE	2,000	0.000
DEB_S11	ONLINE	2,000	0.000
DEB_S12	ONLINE	2,000	0.000
DEB_S13	ONLINE	2,000	0.000
DEB_S14	ONLINE	2,000	0.000
DEB_S15	ONLINE	2,000	0.000
DEB_S16	ONLINE	2,000	0.000
DEB_S17	ONLINE	2,000	0.000
DEB_S18	ONLINE	2,000	0.000
DEB_S19	ONLINE	2,000	0.000
DEB_S20	ONLINE	2,000	0.000
DEB_S21	ONLINE	2,000	0.000
DEB_S22	ONLINE	2,000	0.000
DEB_S23	ONLINE	2,000	0.000
DEB_S24	ONLINE	2,000	0.000
DEB_S25	ONLINE	2,000	0.000
DEB_S26	ONLINE	2,000	0.000
DEB_S27	ONLINE	2,000	0.000
DEB_S28	ONLINE	2,000	0.000
DEB_S29	ONLINE	2,000	0.000
DEB_S30	ONLINE	2,000	0.000
DEB_S31	ONLINE	2,000	0.000
DEB_S32	ONLINE	2,000	0.000
DEB_S33	ONLINE	2,000	0.000
DEB_S34	ONLINE	2,000	0.000
DEB_S35	ONLINE	2,000	0.000
DEB_S36	ONLINE	2,000	0.000
DEB_S37	ONLINE	2,000	0.000
DEB_S38	ONLINE	2,000	0.000
DEB_S39	ONLINE	2,000	0.000
DEB_S40	ONLINE	2,000	0.000
DEB_S41	ONLINE	2,000	0.000
DEB_S42	ONLINE	2,000	0.000
DEB_S43	ONLINE	2,000	0.000
DEB_S44	ONLINE	2,000	0.000
DEB_S45	ONLINE	2,000	0.000
DEB_S46	ONLINE	2,000	0.000
DEB_S47	ONLINE	2,000	0.000
DEB_S48	ONLINE	2,000	0.000
DEB_S49	ONLINE	2,000	0.000
DEB_S50	ONLINE	2,000	0.000
DEB_S51	ONLINE	2,000	0.000
DEB_S52	ONLINE	2,000	0.000
DEB_S53	ONLINE	2,000	0.000
DEB_S54	ONLINE	2,000	0.000
DEB_S55	ONLINE	2,000	0.000
DEB_S56	ONLINE	2,000	0.000
DEB_S57	ONLINE	2,000	0.000
DEB_S58	ONLINE	2,000	0.000
DEB_S59	ONLINE	2,000	0.000
DEB_S60	ONLINE	2,000	0.000
DEB_S61	ONLINE	2,000	0.000
DEB_S62	ONLINE	2,000	0.000
DEB_S63	ONLINE	2,000	0.000
DEB_S64	ONLINE	2,000	0.000
DEB_S65	ONLINE	2,000	0.000
DEB_S66	ONLINE	2,000	0.000
DEB_S67	ONLINE	2,000	0.000
DEB_S68	ONLINE	2,000	0.000
DEB_S69	ONLINE	2,000	0.000
DEB_S70	ONLINE	2,000	0.000
DEB_S71	ONLINE	2,000	0.000
DEB_S72	ONLINE	2,000	0.000
DEB_S73	ONLINE	2,000	0.000
DEB_S74	ONLINE	2,000	0.000
DEB_S75	ONLINE	2,000	0.000
DEB_S76	ONLINE	2,000	0.000
DEB_S77	ONLINE	2,000	0.000
DEB_S78	ONLINE	2,000	0.000
DEB_S79	ONLINE	2,000	0.000
DEB_S80	ONLINE	2,000	0.000
DEB_S81	ONLINE	2,000	0.000
DEB_S82	ONLINE	2,000	0.000
DEB_S83	ONLINE	2,000	0.000
DEB_S84	ONLINE	2,000	0.000
DEB_S85	ONLINE	2,000	0.000
DEB_S86	ONLINE	2,000	0.000
DEB_S87	ONLINE	2,000	0.000
DEB_S88	ONLINE	2,000	0.000
DEB_S89	ONLINE	2,000	0.000
DEB_S90	ONLINE	2,000	0.000
DEB_S91	ONLINE	2,000	0.000
DEB_S92	ONLINE	2,000	0.000
DEB_S93	ONLINE	2,000	0.000
DEB_S94	ONLINE	2,000	0.000
DEB_S95	ONLINE	2,000	0.000
DEB_S96	ONLINE	2,000	0.000
DEB_S97	ONLINE	2,000	0.000
DEB_S98	ONLINE	2,000	0.000
DEB_S99	ONLINE	2,000	0.000
DEB_S100	ONLINE	2,000	0.000

Oracle Storage Manager の画面で表領域を選択するとデータベースの領域情報が表示されます。

ORACLE のデータベースを作成する時、自動拡張に設定していますので通常はディスク容量まで拡張します。

従って、日常の領域管理は、データベースを配置しているディスクの空き容量をチェックすることになります。

空き領域がなくなった場合、ディスクを追加するか、空いているディスク(OS がインストールされているディスクは避けてください)を決定します。

BSS_PACK¥SHELL フォルダには、DBC_CREATE.BAT 及び CRE_TABLESPACE.SAM というファイルがあります。

このファイルは、データベース作成用ファイルで、それぞれの環境に合わせて使い分けます。

データベースの自動作成

DBC_CREATE.BAT は、テーブルスペースと各システムのテーブルを作成する BAT ファイルです。通常は、こちらの BAT を使用することをお勧めします。

この BAT は、新規データベース作成にも使用していますので、すでにデータベースが作成されている場合、途中の処理は下記の手順で実行してください。

使用方法は、DOS プロンプトから以下のコマンドを入力します。

```
BSS_PACK¥SHELL> DBCREATE E 8i
```

E データベースを作成するドライブを指定

ORACLE のバージョンを指定(この例では、ORACLE 8 を指定しています)

ORACLE 8 は 8i

ORACLE 9 は 9i

ORACLE10 は 10g

この BAT ファイルでは、次の作業を実行します。

1. 指定ドライブに BSS_DB というフォルダを作ります。
2. テーブルスペース(DBを配置する器)を作るか否か問い合わせます。ここでは領域を拡張しますので、(Y)を選択します。
3. 指定ドライブにテーブルスペースを作成する、DBC_CREATE.sql というスクリプトが生成されます。この場合、全システムのテーブルスペースを 2MB ずつ作成します。
4. SVRMGR を起動し、テーブルスペースを作成します。
5. SAMPLE データのインポートについては、(N)を選択します。
6. SAMPLE データのフォルダを削除するか否かでは、(Y)を選択します。
7. テーブル作成では(N)を選択します。
8. 統一金融機関コードデータのインポートでは(N)を選択し終了します。

以上で DB の拡張は終了です。

状況に合わせたデータベースの作成

CRE_TABLESPACE.SAM は、テーブルスペースだけを作成するスクリプトのサンプルです。

特定のシステムのデータが大きくなり別領域にテーブルスペースを作成する時、又は複数のドライブにデータベースを配置する時に使用します。

1. テーブルスペースの作成

cre_tablespace.SAM をコピーし cre_tablespace.sql を作り、内容をそれぞれの環境に合わせて修正したうえで使用します。

このファイルの記述は、Eドライブにテーブルスペースを作成('E:¥BSS_DB¥dbacs.dat')するようになっていますので、Fドライブに作成する場合は、'F:¥BSS_DB¥dbacs.dat'の形に修正します。複数ドライブに分散する場合は、以下のように修正します。

データベースを複数ドライブに分散する場合の例

```
*****  
*****
```

```
connect bss/xxxxxx
```

```
-- 表領域の作成を行う
```

```
-- ACSの表領域の作成を行う
```

```
CREATE TABLESPACE DBACS DATAFILE 'E:¥BSS_DB¥dbacs.dat' SIZE 2M reuse autoextend on next  
2M;
```

```
-- BHNの表領域の作成を行う
```

```
CREATE TABLESPACE DBBHN DATAFILE ' E:¥BSS_DB¥dbbhn.dat' SIZE 2M reuse autoextend on  
next 2M;
```

```
-- GLSの表領域の作成を行う
```

```
CREATE TABLESPACE DBGLS DATAFILE ' F:¥BSS_DB¥dbgls.dat' SIZE 2M reuse autoextend on next  
2M;
```

```
-- GMUの表領域の作成を行う
```

```
CREATE TABLESPACE DBGMU DATAFILE ' F:¥BSS_DB¥dbgmu.dat' SIZE 2M reuse autoextend on  
next 2M;
```

```
-- HBIの表領域の作成を行う
```

```
CREATE TABLESPACE DBHBI DATAFILE ' G:¥BSS_DB¥dbhbi.dat' SIZE 2M reuse autoextend on next  
2M;
```

途中省略

```
-- SYS表領域の作成を行う
```

```
CREATE TABLESPACE DBSYS DATAFILE ' G:¥BSS_DB¥dbsys.dat' SIZE 2M reuse autoextend on  
next 2M;
```

```
exit
```

```
*****  
*****
```

ファイルの修正が終了しましたら、以下の要領でテーブルスペースを作成します。

BSS_PACK¥SHELL>svrmgr30

(ORACLE7 では svrmgr23、ORACLE 8i の場合は svrmgr1 となります)

SVRMGR>cre_tablespace;

すでにデータベースが稼働している環境で、ディスク領域が不足した場合は、以上の操作で終了です。

上記の例では、全システムのテーブルスペースを作成していますが、ディスクが一杯になる前にあらかじめテーブルスペースを作成する場合は、大きくなりそうなシステムだけを拡張しておきます。

会計管理(GLS)と購買管理(KBI)が不足しそうな場合には、上記の記述のうち、GLSとKBIの部分だけ記述し、cre_tablespace を実行します。

DB 関連ファイルについて

BSS_PACK¥SHELL フォルダには、データベースに関するファイルが多数あります。

ここでは、それらのファイルについて説明します。

BSS_PACK¥SHELL フォルダ

9. @DBScript.txt

比較的使用する機会の多い、データベースのコマンドを記述しています。

データベースを操作する時、参考にして下さい。

10. BANK_DROP.sql

BANKIMP.BAT(統一金融機関データをインポートする BAT)とともに使用します。

11. BANKIMP.BAT

統一金融機関データをインポートする BAT ファイルです。

12. cre_tablespace.SAM

テーブルスペース作成スクリプトのサンプルです。前述したように、コピーして使用します。

13. DBCREATE.BAT

データベースを自動作成するスクリプトです。この中では、以下の作業を行います。

- DB 関連スクリプトを生成。(作成ファイルは以下のとおり)

BSS_PACK¥Shell フォルダ

BANKIMP.bat、BANK_DROP.sql、CRE_USER.sql、DBCREATE.sql、DBEXP.bat、DBIMP.bat、ORACALL.bat、SAMIMP.bat

BSS_PACK¥Shell¥DBTool フォルダ

BACK_PACK.bat、DBLoad.bat、SAMDEL.bat

- テーブルスペースの作成。
- SAMPLE データのインポート(これを実行した場合は、以下の作業は行いません)
- テーブルの作成
- 統一金融機関コードデータのインポート(BANKIMP.BAT を実行)

14. DBEXP.BAT

データベースのデータをエクスポートします。主に DB 関連の作業を行うとき、安全のために バックアップするときに使用します。

15. DBIMP.BAT

エクスポートしたデータベースのデータをインポートします。この BAT を実行する前に、DBTool フォルダにある ORADALL.sql を実行します。

16. ORACALL.BAT

全テーブルを作成するための BAT ファイルです。oracall.sql とともに使用します。

17. oracxxx.sql (xxx はシステム ID)

各システムのテーブル作成スクリプトです。

18. SAMIMP.BAT

サンプルデータインポート用の BAT です。ここでは DB データと ISAM ファイルをインポートします。単独でも使用しますが、DBCREATE.BAT でも使用します。

BSS_PACK¥DBTool フォルダ

19. BACK_PACK.BAT

前述のデータベースと ISAM のバックアップの時に使用します。

20. DBLoad.bat

BACKUP したデータをインポートします。

21. SAMDEL.BAT

サンプルデータ削除用の BAT です。

22. ORADALL.sql

全テーブルを削除します。すべてのデータが無くなりますので、使用する場合は注意が必要です。

使用方法は、下記の通りです。

```
BSS_PACK¥SHELL¥DBTool>svrmgr30
```

(ORACLE7 では SVRMGR23、ORACLE 8i の場合は svrmgr1 となります)

```
SVRMGR>@ORADALL
```

23. oradxxx.sql (xxx はシステム ID)

各システムのテーブルドロップスクリプトです。

BSS_PACK¥SAVE フォルダ

統一金融機関コードデータ(KBI_KIKAN_TBL.dmp、KBI_SITEN_TBL.dmp)を置いており、BANKIMP.BATによってインポートされます。

統一金融機関コードデータは、会計等で使用されるデータで、日本国内のすべての金融機関名と、支店が網羅されています。(金融機関の再編等による変更が発生した場合は、それぞれ修正してください)

インストール段階で、データをロードしてある場合や、取引金融機関が少なく、手入力が可能であればロードする必要はありません。再実行しても問題ありません。

DBEXP.BAT を実行したとき、DB データは、ここにセーブされます。

BSS_PACK¥SHELL¥SAMPLE フォルダ

サンプルデータ(SAMPLEDAT.dmp)があります。また、BSS_PACK¥DAT¥SAMPLE にもテーブル関係の SAMPLE データがあります。

SAMIMP.BAT では、上記2つのデータが呼ばれます。

■ MS SQL Server

バックアップ

BSS_PACK¥SHELL¥DBTool には、BACK_PACK.BAT というバックアップ用の BAT ファイルがあります。その中では、SQL Servr のユーティリティである BCP.EXE を使用しています。

この BACK_PACK.BAT を DOS プロンプトから実行することで、DAT ファイルと DB データを別ドライブにバックアップすることができます。

使用方法は、次のとおりです

```
BSS_PACK¥SHELL¥DBTool> BACK_PACK F
```

ここで F は、バックアップデータをセーブするドライブ

この結果、Fドライブに BACKUP フォルダ、その下に DAT と DB フォルダが作られ、データはそれぞれの場所にセーブされます。

バックアップデータをセーブするフォルダは、十分な容量を確保してください。

バックアップしたデータは、Windows NT のバックアップツールを使用して、テープデバイス等にバックアップしてください。

SQL Servr のデータベースを直接バックアップする方法については、SQL Servr の Books Online をご覧下さい。

データベースの拡張

ソフトウェア部品では、SQL Servr のデータベースを作成する時、自動拡張に設定していますので通常はディスク容量まで拡張します。

従って、日常の領域管理は、データベースを配置しているディスクの空き容量をチェックします。

空き領域がなくなった場合、ディスクを追加するか、空いているディスク(OS がインストールされているディスクは避けてください)にデータベースを作成します。

既に作られているデータベースのサイズを変更する場合は、SQL Server Enterprise Manager を使用する方法と、T-SQL を使用する方法があります。

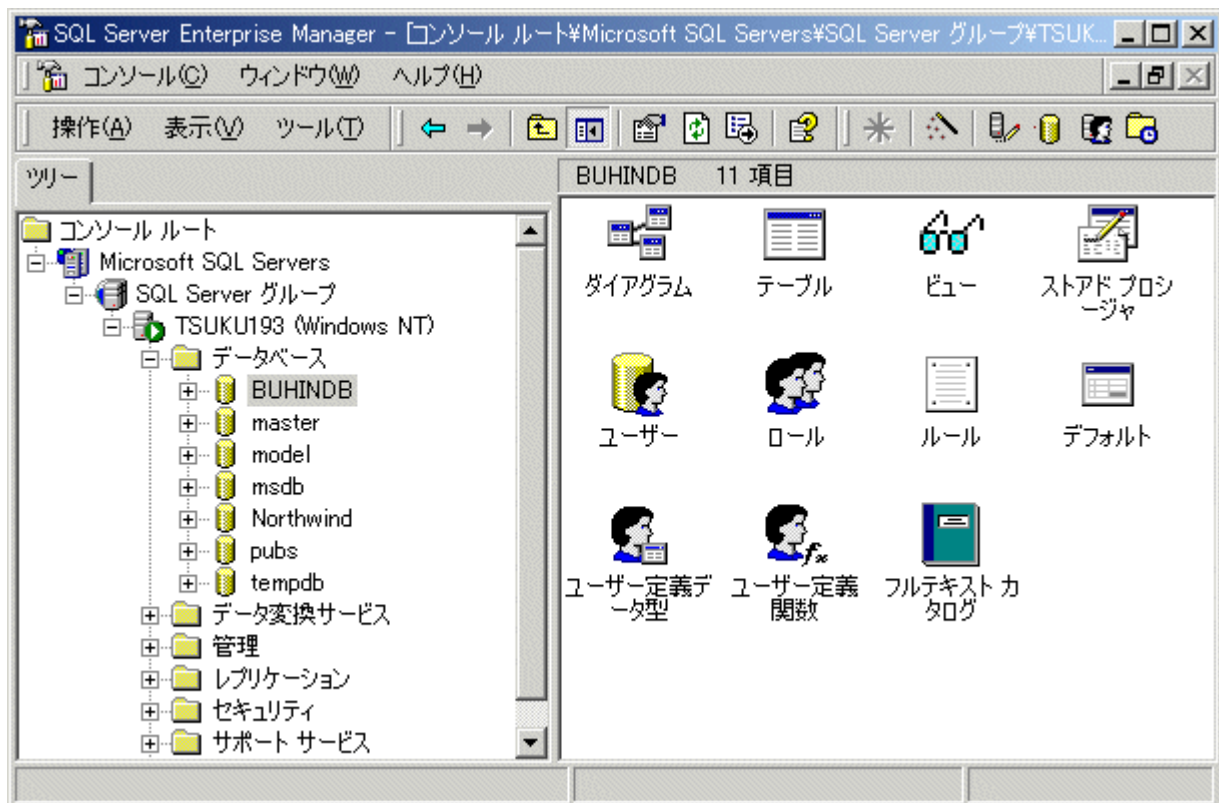
SQL Server Enterprise Manager を使用するデータベースの拡張

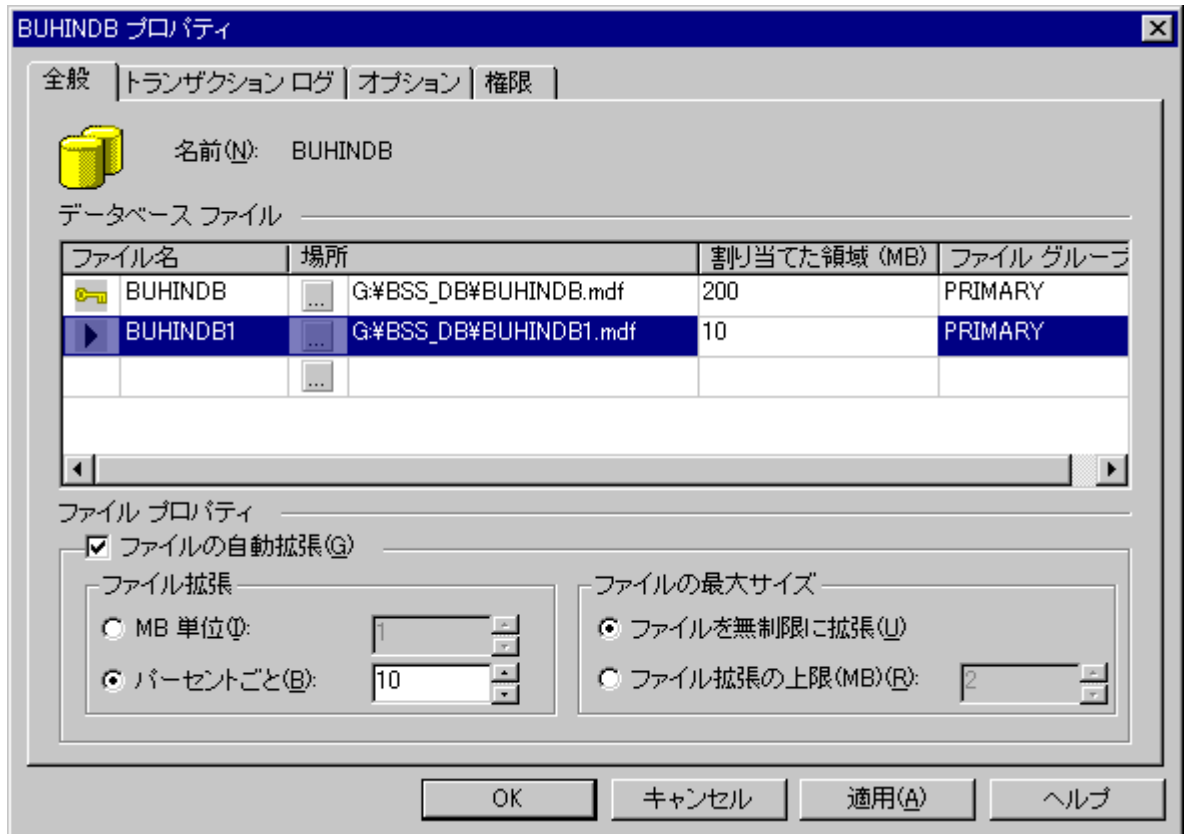
ここではデータベースを Fドライブに拡張する場合を例に取ります。

Fドライブに F:\BSS_DB フォルダを作成します。

SQL Server Enterprise Manager を起動しデータベースを開きます。

BUHINDB を選択しマウスの右ボタンをクリックし、ドロップダウンメニューから「プロパティ」を開きます。





SQL Server7.0 の場合は、プロパティウインドウの「全般」タブを、SQL Server2000 の場合は、プロパティウインドウの「データファイル」タブを選択します。

「ファイル名」BUHINDB の下の空欄にポインタを合わせ、ファイル名を BUHINDB1 とします。

「場所」に移動し、データベースを拡張するドライブのパスを指定します。

ここでは、F:\BSS_DB\ BUHINDB 1.mdf とします。

割り当てた領域に拡張したいサイズを入力します。

ファイルのプロパティは、データベースを作成したときのプロパティを引き継いでいますので、図のようになります。

自動拡張をしない場合は、「ファイルの自動拡張」のチェックをはずしてください。

自動拡張のプロパティを変更する場合は、それぞれ設定してください。

トランザクト SQL による方法

Fドライブに F:\BSS_DB フォルダを作成します。

isql ユーティリティを起動、SQL Server に接続し以下のコマンドを発行します。

以下は、BUHINDB を拡張する例です。

```
1>use master
2>go
1>ALTER DATABASE BUHINDB ----- BUHINDB を拡張します
ADD FILE ----- ファイル追加を指定します
( NAME = BUHINDB1, ----- 追加 DB 名を指定します
FILENAME = 'F:¥BSS_DB¥BUHINDB1.mdf', ----- ファイル名を指定します
SIZE = 20, ----- 作成サイズを指定します
MAXSIZE = UNLIMITED, ----- 無制限を指定(サイズを MB で指定しても可)
FILEGROWTH = 10%) ----- 増加量を指定(サイズを MB で指定しても可)
2>GO
```

DB 関連ファイルについて

BSS_PACK¥SHELL フォルダには、データベースに関するファイルが多数あります。
ここでは、それらのファイルについて説明します。

BSS_PACK¥SHELL フォルダ

24. @DBScript.txt

比較的使用する機会の多い、データベースのコマンドを記述しています。
データベースを操作する時、参考にして下さい。

25. xxx_exp.bat (xxx はシステム ID)

各システムのテーブルを SAVE フォルダにエクスポートします。
テーブルごとにエクスポートしますので、このファイルを参考に必要なデータのみをエクスポート
することができます。
エクスポートしたデータのファイル形式は、タブ区切り形式となっていますので、Excel 等に取り込
むことも可能です。

26. xxx_imp.bat (xxx はシステム ID)

各システムのテーブルを SAVE フォルダからインポートします。
EXP 同様、テーブルごとにインポートします。

27. ACSBCP.BAT・ACSBCP.sql

プライマリーキーがないテーブルをエクスポート／インポートするときのエラーを回避するために
セットします。

28. ALL_EXP.BAT・ALL_IMP.BAT

xxx_exp.bat と xxx_imp.bat をコールし、全データをエクスポート／インポートします。

29. BANKIMP.BAT

統一金融機関データをインポートする BAT ファイルです。

30. DBCREATE.BAT

データベースを自動作成するスクリプトです。この中では、以下の作業を行います。

- DB 関連スクリプトを生成。(作成ファイルは以下のとおり)

BSS_PACK¥Shell フォルダ

BANKIMP.bat、DBCREATE.sql、SQLCALL.bat、SAMIMP.bat

BSS_PACK¥Shell¥DBTool フォルダ

BACK_PACK.bat、DBLoad.bat、SAMDEL.bat、SQLDALL.bat

- データベース作成スクリプト(DBCREATE.sql)に従ってデータベースを作成します。
- SQLCALL.BAT を実行し、各システムのテーブルを作成します。
- トランザクションログを取らない(DBTRUNC_Tr.sql)ように設定します。
- SAMPLE データのインポート(これを実行した場合、以下の作業は行われません)
- 統一金融機関コードデータのインポート(BANK_IMP.BAT を実行)

31. DBTRUNC_Fa.sql／DBTRUNC_Tr.sql

DBTRUNC_Fa.sql は、トランザクションログを取るよう設定します。

DBTRUNC_Tr.sql は、トランザクションログを取らない設定となります。

最初の段階では、データのインポートを実行するとログが一杯になりエラーになるため DBTRUNC_Tr.sql となっています。

32. SAMIMP.BAT

サンプルデータインポート用の BAT です。ここでは DB データと ISAM ファイルをインポートします。単独でも使用しますが、DBCREATE.BAT でも使用します。

33. sqlcxxx(xxx はシステム ID) 各システムのテーブル作成スクリプトです。

34. SQLCALL.BAT

全テーブルを作成するための BAT ファイルです。sqlcxxx とともに使用します。

BSS_PACK¥DBTool フォルダ

35. BACK_PACK.BAT

前述のデータベースと ISAM のバックアップの時に使用します。

36. DBLoad.bat

バックアップしたデータをロードします。

37. SQLDALL.sql

全テーブルを削除します。すべてのデータが無くなりますので、使用する場合は注意が必要です。

38. sqldxxx (xxx はシステム ID)

各システムのテーブルドロップスクリプトです。

39. SAMDEL.bat

サンプルデータを削除します。

BSS_PACK¥SHELL¥SAVE フォルダ

統一金融機関コードデータ (KBI_KIKAN_TBL.dat、KBI_SITEN_TBL.dat) を置いており、BANKIMP.BAT によってインポートされます。

統一金融機関コードデータは、会計等で使用されるデータで、日本国内のすべての金融機関名と、支店が網羅されています。(金融機関の再編等による変更が発生した場合は、それぞれ修正してください)

インストール段階で、データをロードしてある場合や、取引金融機関が少なく、手入力が可能であればロードする必要はありません。再実行しても問題ありません。

ALLEXP.BAT を実行したとき、DB データは、ここにセーブされます。

BSS_PACK¥SHELL¥SAMPLE フォルダ

サンプルデータがあります。また、BSS_PACK¥DAT¥SAMPLE にもテーブル関係の SAMPLE データがあります。各データは、テーブル単位となっています。

SAMIMP.BAT では、このデータが呼ばれます。

■ IBM DB2

バックアップ

BSS_PACK¥SHELL¥DBTool には、BACK_PACK.BAT というバックアップ用の BAT ファイルがあります。

この BACK_PACK.BAT を (注) [スタート]→[プログラム]→[IBM DB2]→[コマンド行ツール]→[コマンド・ウィンドウ] から実行することで、DATファイルとDBデータを別ドライブにバックアップすることができます。

下記のコマンドを実行後、「コマンドが初期化されていません・・・」といったメッセージが表示される場合は、正しくバックアップデータを作成していません。原因は、[スタート]→[プログラム]→[アクセサリ]→[コマンドプロンプト]で実行したためです。再度、IBM DB2 の[コマンド・ウィンドウ]でやり直してください。これは IBM DB2 の仕様です。

使用方法は、次のとおりです

```
BSS_PACK¥SHELL¥DBTool> BACK_PACK F
```

ここで F は、バックアップデータをセーブするドライブ

この結果、Fドライブに BACKUP フォルダ、その下に DAT と DB フォルダが作られ、データはそれぞれの場所にセーブされます。

バックアップデータをセーブするフォルダは、十分な容量を確保してください。

IBM DB2 のデータベースを直接バックアップする方法については、IBM のサポートページ等をご覧ください。

データベースの拡張

ソフトウェア部品では、IBM DB2 のデータベースを作成する時、自動拡張に設定していますので通常はディスク容量まで拡張します。IBM DB2 のデータベースサイズは無制限です。

従って、日常の領域管理は、データベースを配置しているディスクの空き容量をチェックします。

空き領域がなくなった場合、ディスクを追加するか、空いているディスク(OS がインストールされているディスクは避けてください)にデータベースを作成します。

BSS_PACK¥DBTool フォルダ

下記のバッチファイルを実行する際、(注) [スタート]→[プログラム]→[IBM DB2]→[コマンド行ツール]→[コマンド・ウィンドウ] から実行します。IBM DB2 は、[コマンド・ウィンドウ]を使ってデータに関する処理を実行します。下記のバッチファイルを実行すると「初期化されていません…」といったエラーや、実行前と状況が変わらない場合は、通常の[スタート]→[プログラム]→[アクセサリ]→[コマンドプロンプト]で実行したことがおもな原因です。再度、IBM DB2 の[コマンド・ウィンドウ]でやり直してください。これは IBM DB2 の仕様です。

40. BACK_PACK.BAT

前述のデータベースと ISAM のバックアップの時に使用します。

41. DBLoad.bat

バックアップしたデータをロードします。

42. DB2DALL.bat

全テーブルを削除します。すべてのデータが無くなりますので、使用する場合は注意が必要です。

43. db2dxxx (xxx はシステム ID)

各システムのテーブルドロップスクリプトです。

44. SAMDEL.bat

サンプルデータを削除します。

DB 関連ファイルについて

BSS_PACK¥SHELL フォルダには、データベースに関するファイルが多数あります。ここでは、それらのファイルについて説明します。

BSS_PACK¥SHELL フォルダ

45. xxx_exp.bat (xxx はシステム ID)

各システムのテーブルを SAVE フォルダにエクスポートします。

テーブルごとにエクスポートしますので、このファイルを参考に必要なデータのみをエクスポートすることができます。

エクスポートしたデータのファイル形式は、タブ区切り形式となっていますので、Excel 等に取り込むことも可能です。

46. xxx_imp.bat (xxx はシステム ID)

各システムのテーブルを SAVE フォルダからインポートします。

EXP 同様、テーブルごとにインポートします。

47. ALL_EXP.BAT・ALL_IMP.BAT

xxx_exp.bat と xxx_imp.bat をコールし、全データをエクスポート／インポートします。

48. BANKIMP.BAT

統一金融機関データをインポートする BAT ファイルです。

49. DBCREATE.BAT

データベースを自動作成するスクリプトです。この中では、以下の作業を行います。

- DB 関連スクリプトを生成。(作成ファイルは以下のとおり)

BSS_PACK¥Shell フォルダ

BANKIMP.bat、DBCREATE.sql、DB2CALL.bat、SAMIMP.bat

BSS_PACK¥Shell¥DBTool フォルダ

BACK_PACK.bat、DBLoad.bat、SAMDEL.bat、DB2DALL.bat

- データベース作成スクリプト(DBCREATE.sql)に従ってデータベースを作成します。
- DB2CALL.BAT を実行し、各システムのテーブルを作成します。
- SAMPLE データのインポート(これを実行した場合、以下の作業は行われません)
- 統一金融機関コードデータのインポート(BANK_IMP.BAT を実行)

50. SAMIMP.BAT

サンプルデータインポート用の BAT です。ここでは DB データと ISAM ファイルをインポートします。

単独でも使用しますが、DBCREATE.BAT でも使用します。

51. db2cxxx (xxx はシステム ID) 各システムのテーブル作成スクリプトです。

52. DB2CALL.BAT

全テーブルを作成するための BAT ファイルです。sqlcxxx とともに使用します。

BSS_PACK¥SHELL¥SAVE フォルダ

統一金融機関コードデータ(KBI_KIKAN_TBL.dat、KBI_SITEN_TBL.dat)を置いており、BANKIMP.BAT によってインポートされます。

統一金融機関コードデータは、会計等で使用されるデータで、日本国内のすべての金融機関名と、支店が網羅されています。(金融機関の再編等による変更が発生した場合は、それぞれ修正してください)

インストール段階で、データをロードしてある場合や、取引金融機関が少なく、手入力が可能であればロードする必要はありません。再実行しても問題ありません。

ALLEXP.BAT を実行したとき、DB データは、ここにセーブされます。

BSS_PACK¥SHELL¥SAMPLE フォルダ

サンプルデータがあります。また、BSS_PACK¥DAT¥SAMPLE にもテーブル関係の SAMPLE データがあります。各データは、テーブル単位となっています。

SAMIMP.BAT では、このデータが呼ばれます。